

2020. 4. 19 第三主日礼拝

ヨハネ 20:19-29 「平安があるように」

聖書

19 その日、すなわち週の初めの日の夕方、弟子たちがいたところでは、ユダヤ人を恐れて戸に鍵がかけられていた。すると、イエスが来て彼らの真ん中に立ち、こう言われた。「平安があなたがたにあるように。」

20 こう言って、イエスは手と脇腹を彼らに示された。弟子たちは主を見て喜んだ。

21 イエスは再び彼らに言われた。「平安があなたがたにあるように。父がわたしを遣わされたように、わたしもあなたがたを遣わします。」

22 こう言ってから、彼らに息を吹きかけて言われた。「聖霊を受けなさい。

23 あなたがたがだれかの罪を赦すなら、その人の罪は赦されます。赦さずに残すなら、そのまま残ります。」

24 十二弟子の一人で、デドモと呼ばれるトマスは、イエスが来られたとき、彼らと一緒にいなかった。

25 そこで、ほかの弟子たちは彼に「私たちは主を見た」と言った。しかし、トマスは彼らに「私は、その手に釘の跡を見て、釘の跡に指を入れ、その脇腹に手を入れてみなければ、決して信じません」と言った。

26 八日後、弟子たちは再び家の中におり、トマスも彼らと一緒にいた。戸には鍵がかけられていたが、イエスがやって来て、彼らの真ん中に立ち、「平安があなたがたにあるように」と言われた。

27 それから、トマスに言われた。「あなたの指をここに当てて、わたしの手を見なさい。手を伸ばして、わたしの脇腹に入れなさい。信じない者ではなく、信じる者になりなさい。」

28 トマスはイエスに答えた。「私の主、私の神よ。」

29 イエスは彼に言われた。「あなたはわたしを見たから信じたのですか。見ないで信じる人たちは幸いです。」

はじめに

先週はイエスさまの復活をお祝いするイースターでした。新型コロナウイルスによる影響で教会に集まることをせず自宅での礼拝としました。ライブ配信を受け取れる環境の方々もおられれば、そうでないの方々もおられます。形はそれぞれですが、イースターをお祝いする意義は全く変わりませんので、主の復活を喜び、一週を出発しました。イースターから一週間経ちましたが、復活の喜びは心に燃えているでしょうか。キリスト教会が日曜日に礼拝をささげる理由が主の復活にあることはご存知だと思います。私たちは週ごとに主の復活を心に覚えて、喜びの出発をしているわけです。たとえ深刻な問題・課題を抱えていたとしても、またはとても喜べる状況ではないとしても、主が復活されたことは事実ですので、週の初めに問題・課題から目を離し、復活の主の心に心を向けることは大切です。今週も復活の主にお会いして出発しましょう。

1. 復活の主の二度の顕現

今日の聖書箇所には、復活の主の顕現が2回に亘って記されています。一回目はよみがえられた当日の夕方のことです。「その日、すなわち週の初めの日の夕方、弟子たちがいたところでは、ユダヤ人を恐れて戸に鍵がかけられていた。すると、イエスが来て彼らの真ん中に立ち、こう言われた。『平安があなたがたにあるように。』」（19節）。これは先週学びましたルカ 24:36-43と同じ出来事で、復活されたイエスさまがご自分の手と脇腹を弟子たちに見せて、確かによみがえったことを示されました。

その出来事から一週間後の日曜日に再びイエスさまは弟子たちに現れてくださいました。それが二回目の顕現で24~29節に記されています。この二回目のイエスさまの顕現は、12弟子の一人であるトマスのために現れてくださったと言っても過言ではないほど、トマスにとって強烈な印象を残すものとなりました。実は、イエスさまが一回目にご自分を現わされたとき、その場にトマスはいませんでした。なぜいなかったのか理由は書かれていませんが、弟子たちがトマスに「私たちは主を見た。」(25節)と言っても、トマスは「私

は、その手に釘の跡を見て、釘の跡に指を入れ、その脇腹に手を入れてみなければ、決して信じません。」(25 節)と悔しさをにじませるような強いことばを発しています。一人だけ仲間外れにされてしまったような寂しさが感じられます。トマスの気持ちはよくわかります。彼と同じ状況に立ったら、きっと同じように言うでしょう。このときのトマスのことばをよく覚えておいてください。後にイエスさまがトマスのことばをもって、はっきりとご自分を示されたのです。

2. 恐れが続く中での顕現

主の復活の当日、弟子たちはイエスさまを失ってしまった悲しみとこれからどうしていけばよいのか分からない不安、さらには自分たちにも迫害の手が伸びるかもしれないという恐れを抱いていました。それゆえに「ユダヤ人を恐れて戸に鍵がかけられていた。」(19 節)のです。この恐れは一週間経っても消えることはありませんでした。「八日後、弟子たちは再び家の中におり、トマスも彼らと一緒にいた。戸には鍵がかけられていたが、イエスがやって来て、彼らの真ん中に立ち、『平安があなたがたにあるように』」(26 節)とされました。弟子たちは硬く戸を閉じ、外との接触を断っていました。それは彼らの心を表しているようにも見えます。戸にも心にも鍵をかけて、不安と恐れに耐えている姿を見ます。人は時にこうした状況に陥ることがあります。どんなに強く見える人でも、不安と恐れの中に閉じ込められてしまうような辛い経験をすることがあります。ですから、硬く心を閉ざしてしまうような方を見ても、批判したり責めたりしてはいけません。そのような方の心を開いてくださるのはイエスさまのみです。人は誰も人の心を開くことはできないからです。

硬く閉ざされた世界にイエスさまは「平安があなたがたにあるように」と言って入って来られました。この「平安」ということばには特別な意味が込められていると思います。新約聖書はギリシア語で書かれていますので、「平安」はエイレーネと言いますが、ユダヤ人はシャローム（ヘブル語）と言って平安を表します。本来シャロームは「こんにちは」とか「こんばんは」と

いう普通の挨拶のことばです。ですから、復活の主が二度に亘って弟子たちに現れてくださったときも、挨拶の声掛けとして理解できるかもしれませんが、単なる挨拶ではないと理解しています。イエスさまは恐れを抱く者に平安を与える方としてご自分を現わされたのです。弟子たちが今一番必要としているものが平安であることを知っておられるイエスさまが、「平安があなたがたにあるように」と言って近づいてくださったのです。今、平安が欲しい方がおられましたら、その方のところに復活の主は現れてくださるのです。

3. 主が与えてくださる平安

イエスさまは、ご自分が与える平安とは何かをヨハネ 14:27 と 16:33 に示しておられます。これはまだイエスさまが十字架にかかる前のことで、やがて起こる十字架に向けて、弟子たちに語られたものです。二つのみことばを紹介します。ヨハネ 14:27「わたしはあなたがたに平安を残します。わたしの平安を与えます。わたしは、世が与えるのと同じようには与えません。あなたがたは心を騒がせてはなりません。ひるんではなりません。」、ヨハネ 16:33「これらのことをあなたがたに話したのは、あなたがたがわたしにあって平安を得るためです。世にあっては苦難があります。しかし、勇気を出さない。わたしはすでに世に勝ちました。」

イエスさまが与えてくださる平安はこの世が与える平安とは違います。世の中にも平安を与えてくれるものはたくさんあります。信頼できる人間関係や安心して暮らせる経済、健康な心身など私たちに平安を与えてくれる材料はたくさんありますが、それらは失われてしまうかもしれない脆さを持っています。しかしイエスさまが与えてくださる平安は、世が与えるのとは違い奪われることのない平安です。さらに、世には苦難が満ちていても苦難に打ち勝った平安を与えると約束してくださったのです。そのような奪われることのない平安、苦難に打ち勝った平安の根拠が復活の事実の中にあるのです。今も生きておられるイエスさまのゆえに、その方が与えてくださる平安は信じる者に永遠の満たしを与えるのです。主は苦難に打ち勝たれた証として、十字架の死を打ち破りよみがえられました。人間には決して越えられない死

に勝利された平安を与えてくださるのです。私たちはこの平安を握って生きる者です。今、世の中全体が不安の中にいます。それゆえに、イエスさまの平安を握って生きている一人一人が、不安の中にいる方々に寄り添い、励まし合って生きて行きたいと願わされます。

4. 主の平安を握ろう

イエスさまが与えてくださる平安を個人的に受け取るためにはどうしたらよいのでしょうか。その答えが冒頭に触れたトマスのことばの中にあります。トマスは自分の指と手をイエスさまの傷跡に入れてみなければ、決して信じないと言いました。このことばを受けて復活されたイエスさまは「あなたの指をここに当てて、わたしの手を見なさい。手を伸ばして、わたしの脇腹に入れなさい。信じない者ではなく、信じる者になりなさい。」(27節)とトマスの心に切り込まれたのです。さすがのトマスも目の前に示されたイエスさまの傷跡に自分の指と手を入れることはできませんでした。そして「私の主、私の神よ。」(28節)と、トマス自身がイエスさまを主と呼び、神と個人的に告白したのです。一週間前のトマスは、弟子たちから主の復活の事実を聞かされたわけですが、個人的には体験していませんでした。しかし、今ここでは、個人的にイエスさまと出会い、疑うことのない事実として主の復活を受け入れました。個人的なイエスさまとの出会いがクリスチャンの生命線です。多くの方はキリストについて学校で学んだ知識は持っています。ミッション系の学校を出ている人はキリスト教文化に触れて来ています。中にはクリスチャンの友人を持っている人がいれば、もう少し詳しくキリスト教についての知識は持っているでしょう。しかしそのような方々がイエスさまという人格を持ったお方と出会い、触れているかということそうではありません。トマスのようにイエスさまとの個人的な出会いが何よりも大切なのです。そのためには、罪ある者として十字架の前に立つことが求められ、イエスさまの十字架による赦しを頂くことが不可欠なのです。主の十字架と復活の前に一人一人が立ち、「私の主、私の神」と告白して生きる者でありましょう。

まとめ

今日の礼拝で復活の主にお会いできたことを感謝します。イエスさまは私たちの真ん中に立ち、「平安があなたがたにあるように」と二度も語ってくださいました。今、平安を必要としている方はイエスさまのことばを受け取ってください。イエスさまが与えてくださる平安は、奪われることのない平安であり、苦難に打ち勝った平安です。この平安は信じる者の内にいつまでも与えられ続ける平安です。平安をもって私たちの前に立っておられるイエスさまに触れ、安心して今週を出発しましょう。最後にイエスさまはトマスに言われました。「あなたはわたしを見たから信じたのですか。見ないで信じる人たちは幸いです。」(29 節)。今、私たちはイエスさまをこの目で見ることはできません。しかし心で信じているゆえに、いつも共におられる方としてリアルに感じて生きています。見ずして信じる幸いを体験している者であることを感謝し、この恵みが一人でも多くの方に届くように証人として歩ませていただきますように。愛する兄弟姉妹の今週の歩みが祝福されますようにお祈りします。